

## A Hypothesis for Early Kofun Rulership

### 古墳時代前期における統治支配権仮説

本論は、古墳時代前期の統治支配権が、中国から伝来した西王母神話に依拠しているとした2007年の論考を継承したものである。様々な考古学的、文献的データと日本の当時の大陸との関係を照合すると、西王母は、統治権の正統性を賦与する役割と同時に、統治者の死後、その霊を他界へと導く役割を担っていたと考えられる。古墳時代前期の三輪王朝は、その地勢的な制約から見て、西日本全体を支配していたとは考えにくく、それは考古学的所見とも符合している。古墳文化が三輪を越えて広がっていったのは、西王母に擬え得るカリスマ的存在（卑弥呼？）が、その威光にあやかろうとする地方豪族たちを引きつけたと見るのが妥当であろう。巨石、石室、翡翠ないし翡翠様鉾物、青銅鏡といった古墳時代前期の埋葬法の特徴も、西王母の属性に帰することができる。特に青銅鏡の尤品に西王母の像が刻まれていることはそれを強く裏づけている。さらに天照大神も、5世紀から7世紀にかけて歴史時代に入った日本において、統治権の正統性を固めるという意味で、西王母神話の系譜に連なる神として立てられた可能性があることを論じた。

## Shōmu Tennō and the Deity from Kyushu: Hachiman's Initial Rise to Prominence

### 聖武天皇と九州の神：八幡神の興隆

それまで周縁的な存在であった九州の神、八幡神は、749年に東大寺大仏の守護神とされて以来、日本の神々の位階を急速に駆け上った。これは言うまでもなく、大仏建立の主であった聖武天皇の個人的尽力に依るところが大である。本論は、八幡神のこの異例の昇格を、聖武天皇の八幡神観と後代の八幡神観の変化を中心に再検討したもので、八幡神の拔擢について、二つの理由を提起した——1) 八幡神が貴族階級の氏神たちの既存の組織から比較的独立した神であったために、宮廷における複雑な政治的・宗教的権謀術数から中立的立場に立っていたこと、2) 聖武天皇に、当時の政庁である太宰府の支配が及び難かった九州に、政治的・宗教的拠点を築こうとする思惑があったこと。この脈絡で考えると、八幡神の名高い託宣能力は、それを聖武天皇が見込んで登用したというよりは、事後に賦与された能力だと見ることができる。本論ではさらに、769年の道鏡の神託事件後、八幡神の託宣は威光を失い、八幡信仰そのものが危機を迎えた可能性が高いことを指摘した。道鏡についての託宣の欺瞞を暴いた和気清麻呂は、8世紀後半に八幡神の復位に尽力する中心人物の一人であったと思われる。八幡神が高い神格を保持し得た主な要因は、総合的に見て、その菩薩的な風貌にあったと見るのが最も有力であろう。八幡神は歴史の有為転変を経るうちに菩薩性を帯びるようになり、神々の中でも一頭地を抜く存在になったと考えられる。

## The Catholic Architecture of Early Modern Japan: Between Adaptation and Christian Identity 近世日本のカトリック建築：日本への順応とキリスト教のアイデンティティの狭間で

近世初期のキリスト教禁止に至るまでの福音伝道の時代、いわゆる「切支丹の世紀」

（1549–1639）におけるカトリック建築は、これまで比較的未開拓の領域に留まってきた。それはキリシタン関係の建造物が完全に破壊され、証拠となる残存文献も少なく、研究の手立てが限られていたためだが、近年、西洋の宣教関係の文献を批判的に検討する新しい研究方法が開拓されてきた。本論は、そのアプローチに拠りながら資料を再吟味し、日本の切支丹建築について調査したものである。教会を自国の西洋風の建築様式にすることを望んだ宣教師たちは、日本の伝統建築を改築する際にどのような問題に直面したのか、さらに宣教師、および敬虔な信徒たちは、カトリックのアイデンティティを可視化すべく、その建築をどのように用いたのかに焦点を合わせて考察する。

18世紀イギリスのピクチャレスク趣味に関する幾多の論究の嚆矢とされるサー・ウィリアム・テンプル（1628–99）の論文にシャラワジ（*sharawadgi*）という用語が登場する。この概念によってテンプルはイギリスの風景式庭園流行の創始者と見なされるようになったのだが、20世紀半ば以降、都市計画や現代美術についての学術的な議論の中で、シャラワジへの言及が次第に増えてきている。テンプル自身は中国語由来と考えていたこの用語の起源と意味を探る試みが幾つかなされてきた。本論は日本語起源説（「洒落味」）を採る。その際、ただ音と意味だけの詮索に留まるのではなく、その言葉が元々使われていた風土（日本）でどのような機能的、歴史的コンテクストを有していたか、またそれがヨーロッパで行われていた造園術に対し、どのような新しい創造的インスピレーションをもたらしたかについて論じた。日本の美学が顕著に見られる美術作品がヨーロッパに持ち込まれると、ヨーロッパの人間が理解しやすいように、風景や他の応用美術に対する複雑な西洋趣味世界の枠組みの中で、解釈のし直しが行われる。テンプルのような博学多識の文人は、書簡や書籍、他の文物のやり取りを通じて文人サークルを形成しており、学術世界の動向についての最新の情報を求めている。北ヨーロッパのこうした知識人たちは、フランス語、英語、オランダ語、ドイツ語、ラテン語でコミュニケーションを交わし、概念用語として古典ギリシャ語が用いられることもあった。テンプルを取り巻く世界は、このようにコスモポリタンの西洋であり、アジア美術の美学や謎めいたシャラワジのような概念に対する感受性も有していた。本論は、この美学用語の日本における意味と文脈、それがヨーロッパに伝わりテンプルのサークルに入り込み、テンプルがその概念を自分の目的に合うように少し違った文脈に置いた経緯を明らかにしたものである。最後に、テンプルがシャラワジに籠めた意味内容は「文学的なピクチャレスク趣味」であったと結論づけた。

## Informal Imperialism and the 1879 *Hesperia* Incident: Containing Cholera and Challenging Extraterritoriality in Japan

非公式帝国主義とヘスペリア号事件 (1879) : コレラ防疫と日本の治外法権撤廃要求

「非公式帝国」とは、アヘン戦争以後の東アジアにおけるイギリスを定位した外交史上の古典的用語であるが、内実はそれほど単純ではないという議論がある。本論は、そうした議論に与し、「非公式帝国主義」というパラダイムを、西洋列強および日本居留の西洋人と日本との関係という視点から問い直したものである。日本が西洋列強と締結した治外法権の取り決めは、周知のように 1880 年代、90 年代初めの日本において、西洋帝国主義に対する条約改正運動を惹起したのだが、それ以前に、西洋列強の側からの国際法的・国際政治的規範に則つての支援も一部あったことを認識する必要がある。1879 年 7 月 15 日ドイツ政府が商船ヘスペリア号に日本の検疫規則を無視して横浜港への入港を命じたことは、日本人を激昂させたばかりでなく、国際的な非難も掻き立てた。ある研究者たちはこの強制入港によってコレラが日本に蔓延し、1879 年だけでも 10 万人以上の死者を出したという。この事件を契機に、西洋列強の治外法権について、日本のみならず西洋においても激しい議論が行われ、国際条約の見直しを求める声が再び高まり、日本の海洋検疫体制の改正につながったのである。このように、現在では忘れられてしまったヘスペリア号事件は、治外法権の性格についての見解と流行病への対処の仕方において西洋列強間にばらつきがあったことを見るには好個の歴史的出来事になっている。西洋帝国主義者たちが共同戦線を張って自分たちの「不平等条約」解釈を無力な日本に押し付けたとする通念に疑義を呈することが本論の主旨である。

Takahashi Tomio's *Henkyo*: Eastern Easts and Western Wests  
高橋富雄の『辺境』：東洋の東部と西洋の西部

1979年、歴史家の高橋富雄は、フレデリック・ジャクソン・ターナーの「フロンティア学説」を日本の国家と国民の形成に適用し、西部のフロンティアがアメリカ人の国民性を決定づけたように、日本の東のフロンティアが古代日本史の流れと国の姿を決定づけたと論じた。高橋は東北出身の東北古代史研究者で、中心と周縁、中央政権と辺境が相互にアイデンティティーを形成し合うという構造モデルを提出し、日本史研究のこれまでの枠を乗り越えようとした。本論は、高橋の個人的経歴と戦後初期の日本の歴史学の普遍性追求の傾向に注目しながら高橋理論の展開をたどる。高橋の「フロンティア学説」の日本への適用は結局定着せず、彼の東北研究における名声も衰退していった。しかし、1990年代初めにいわゆる「縄文ブーム」と「東北学」が興ったことによって、日本の東北地方を重視すべきだという彼の目標は、「フロンティア学説」が夢見た以上に達成されることになった。一方で東北学の中心人物である赤坂憲雄などは、高橋のフロンティア学説を、普遍的歴史法則を銜ったゆえではなく、東北を征服と搾取の対象である後進的な僻地としている点で、はっきりと斥けている。

## Japanese Tourism to Mukden, Nanjing, and Qufu, 1938–1943

### 1938–1943 年における奉天、南京、曲阜への日本人観光

大日本帝国の文化遺産としての観光資源は帝国の拡張につれてその範囲を広げた。本論は、1938年–43年における大陸の三つの土地——奉天、南京、曲阜——への日本人観光、およびその観光振興計画と広報活動を考察したものである。政府も民間観光業も、新規に版図に加えられた土地の過去の文化遺産と新しい遺産（たとえば戦跡）をさっそく観光資源化し、観光の振興と帝国事業の大義の広報を図った。奉天、南京、曲阜への観光と観光事業には、満州（奉天）、中華民国（南京）、古典的中国（曲阜）というそれぞれ多層的な文化遺産に対する当時の日本が抱いていた複雑な対中意識とともに、アジア文明の擁護者を自任していた大日本帝国としての意識が反映している。

## Hellen Keller's Civil Diplomacy in Japan in 1937 and 1948

### ヘレン・ケラーの 1937 年と 1948 年の民間外交

本論は、ヘレン・ケラーの 1937 年と 1948 年の訪日が日米の民間外交として持つ意義を批判的に評価したものである。ほどなく盧溝橋事件が起ころうとしていた 1937 年、ケラーは日本を訪問、天皇や首相、他の高官たちからの歓迎を受け、ルーズベルト大統領からの日米友好再確認の親書を手渡した。当時の駐日アメリカ大使ジョゼフ・グルーは、彼女をアメリカの親善外交を最も成功させた人物の一人と見なしている。ケラーは日本の統治下にあった朝鮮と日本の傀儡国家であった満州国も訪問した。彼女の目的は身障者に対する福祉の推進であったが、日本政府と関東軍は、彼女の訪問を日本の北支政策をアメリカに説明する機会と捉えて熱心に支援した。戦争を挟んで 1948 年に招待を受けて再来日したケラーは、廃墟となった広島、長崎を含む 30 以上の都市を歴訪、マッカーサーに日米関係の改善を訴え、天皇に拝謁し、何十万人もの日本人と握手を交わした。この時期は日本の対米観とアメリカの対日観の双方が変わり始めていた時期であった。昭和天皇は、民主的な新生日本において戦争による傷痍者に対する福祉の重要性を認識する慈愛に満ちた指導者として描かれ、一方、広島、長崎の被爆者たちは、ケラーの訪問をアメリカの贖罪意識の表れと解釈した。彼女の民間外交が大きな成果を収めたことで、アメリカ国務省はケラーを、アメリカの理想を体現する最も効果的なシンボル、貴重な政治的資産として認識するようになった。



## Floating Signifiers: The Plural Significance of the Grand Shrine of Ise and Incessant Re-signification of Shinto

浮遊するシニフィアン：伊勢神宮の多義性と神道の意味のうつろい

伊勢神宮は神道の伝統の中心として、日本文化史の原点として機能してきたという共通理解がある。しかし前近代の文献を見れば、そうした伊勢神宮の歴史的役割についての理解の大部分は、近現代になってからの様々な再解釈の産物であることが分かる。本論は、記号論的アプローチを用い、伊勢神宮に対する文化的意味づけの諸相——シンボリズム、儀礼、表象——が再文脈化され、再表象化、再創出されてきた幾つかの事例を取り上げて考察したものである。特に、神道の歴史的連続性の強調によって、文化的、推論的文脈が無視され、さらに重大なことには、形式（シニフィアン）とコンテンツ（シニフィエ）の区別がうやむやにされる傾向が生じ、多少なりとも意図的に、歴史的、概念的な変化の跡が消される結果になっていることを指摘した。記号論的アプローチを通して見れば、伊勢における神道の伝統の多くが、明確な意味を欠いた、儀礼化された形式の保存・伝達・反復であることが見えてくる。逆に言えばそれが、近現代の、神道一般の伝統、特に伊勢神宮の神道の伝統に関する「意味の追求」を生んでいる。本論は、神道に関する通説に多く見られる統一的原理の模索から脱却し、資料、研究方法、感覚の複数性・多様性に心を開いた、新しい神道理解の試みである。